

旧呉海軍工廠塔時計

旧呉海軍工廠塔時計は、元々は旧呉海軍工廠技術部の上に設置されていたもので、技術者や造船所の作業員の調整に使われていた。この時計が作られたのは、1921 年のことで当時は興行的な武器・兵器の大規模生産が行われていた。生産をスケジュール通りに行うことで生産性が向上し、戦艦の建造時間を短縮することができたが、この大時計はそのスケジュールを守るために欠かせない役割を果たしていた。

高さ 10 メートルの時計塔には、4 つの面のそれぞれに直径 1.5 メートルの文字盤が表示されている。時計の内部構造は、海水で腐食されにくい真鍮、亜鉛、スズの合金であるネーバル黄銅でできしており、もともとは船のハードウェアを作るために開発された。呉海軍工廠は、日本で最初の大規模な軍需生産の場であったことから、日本で最初に作られた電気機械式のマスタースレーブ式インパルス時計である。この時計は、4 つの文字盤すべてに電気的なインパルスを送り、同時に時計を動かすという当時としては画期的な機構を採用している。

第二次世界大戦終了後、時計塔は退役し、間もなく入船山記念館に移築された。1981 年には呉市の有形文化財に指定され、修理・改修が行われた。現在は小中学生が作曲したメロディーが 1 日 4 回流れている。